幼稚園の配布文書に見るニーズ別語彙シラバスの課題
「情報のトリアージ」を踏まえた頻出語調査より

Issues of Vocabulary Syllabus by the Needs Found in the Handouts of Kindergarten; From the Frequent Words Survey based on *Triage of Information*

望月雅美[i]

MOCHIZUKI Masami

（要旨）

本稿は、ニーズ別語彙シラバスを作成する過程に、情報の重要度という新たな視点を加えるものである。幼稚園の配布文書を調査対象とし、全て一括で集計した場合と「情報のトリアージ」という考えをもとに情報の重要度別に集計した場合の頻出語の違いを比較した。その結果、使われている名詞には情報の重要度ごとに異なる特徴が見られた。ニーズ別語彙シラバスの作成のためには、学習者が読み取らなければならない情報の緊急性、重要性を考え、文書を選別して調査を行う必要性が示唆される結果となった。この「情報のトリアージ」という視点を入れることは、すべての読み手にとって読みかたを選べる有益な手段だと考えられる。

キーワード：幼稚園、外国人保護者、配布文書、情報のトリアージ、読解

1. はじめに

日本語学習者の学習目的が多様化する中、それぞれのニーズに合わせて使用頻度の高い語彙や文法を調査する研究が見られるようになった。たとえば、子どもを幼稚園に通わせている外国人保護者[ii]の中には、幼稚園の情報を得たいのに園から配られる文書の日本語が読めないという問題が生じており、配布文書を読めるようになりたいというニーズが生まれている。そこから幼稚園の配布文書を調査対象とし、そこに使われている文法や語彙の使用頻度を調査するような研究が生まれている。ニーズを満たす語彙が提供できるようになれば、日本語学習を進める上で大きな利点と考えられる。

しかし、全ての配布文書を集計し、使用頻度が高いと評価された語彙は、そのまま学習すべき重要な語彙だと捉えて良いものだろうか。配布文書によって園が伝えてくる情報の中には、喫緊に伝えたい情報だけでなく、すぐに読む必要のない情報も含まれているはずである。それを一括りにして集計することで、本当に必要な語が上位に上がらない可能性も考えられる。そこには使用頻度の高さだけでなく、重要度という視点を加える必要があるのではないだろうか。

本稿では、幼稚園の配布文書に使われている語彙を全て一括して集計した結果と、「情報のトリアージ」という考えをもとに情報の重要度別に集計した結果の違いを分析し､情報の重要度という視点を加えた場合、使用頻度にどのような違いが見られるか調査する。結果をもとに、学習者に提供する新たな語彙シラバス作りの示唆を得ることを目的とする。

---

[i] 埼玉大学　日本語教育センター非常勤講師

[ii] ここでは、日本語を母語とせず日本語学習を必要とする保護者のことを指す。

2. 先行研究及び問題の所在

佐藤他（2004）の調査によると、外国人保護者からは「幼稚園からの日本語の手紙の内容が分からない」、手紙にルビが振られていたとしても「文字を読めても意味が理解できない」という声があることが指摘されている。首藤（2005）の実態調査では、幼稚園の保育者、外国人保護者の双方が「配布物」等の言語面について困難さを感じていること、また伝わらないために情報不足となり誤解や失敗を招いていることを明らかにしている。日本語教育からの研究は富谷他（2012）、内海・澤（2013）、樋口（2014）、西尾・塚原（2015）などがあり、配布文書を読むことは子育ての上で欠かせない行為であること、しかし外国人保護者にとっては語彙・文法両面から見て難解であり、配慮が必要であることが指摘されている。その対策としては、文書を作る際に①ルビをふる②見出しを付ける③行動を起こさないといけないことを強調する（樋口 2014）、やさしい日本語に書き換え、幼稚園における言い換え・語彙リストを作成する（西尾 2013）などが挙げられている。

教育機関における配布文書を対象コーパスとした研究には長谷川・西尾（2016、2017）、森（2016）がある。長谷川・西尾（2016）では『幼稚園配布文書コーパス』の一部と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ）との比較調査を行い、幼稚園の配布文書は品詞構成、語彙構成とも BCCWJ とは異なり、品詞ごとに頻出する語にも特徴が見られたことを指摘している。具体的には、動詞や形容詞は BCCWJ と共通する語が多いのに対し、名詞に関しては「「子供」「子」「一緒」など特徴的な語彙が見られ」、BCCWJ と「共通する語彙が少ない」としている（表１）。

表 1　長谷川・西尾（2016：248）「表 3.名詞とその出現頻度（上位 11 語）」

幼稚園サンプル		ＢＣＣＷＪ	
名詞	頻度	名詞	頻度
事	57	事	740,949
子供	50	物	276,332
子	45	年	246,629
一緒	32	時	162,023
会	31	人	156,890
日	27	為	152,779
組	25	月	152,090
母	24	中	116,641
弁当	24	自分	111,079
家	23	所	108,040
皆	23	方	96,578

一方、森（2016）は学校の配布物を対象コーパスとし、BCCWJ と比較調査を行っている（表 2、3）。結果は長谷川・西尾（2016）と同様に、動詞は「対象者のニーズを考慮しない一般的に頻度が高い語彙シラバスを共用してもよい」とする一方で、名詞においては BCCWJ との一致度が低く、配布文書に使われている語彙が特殊であることを指摘している。いずれにしても、配布文書には BCCWJ と異なる特徴的な名詞が頻出していることがわかる。

しかし、これらの表を見る限り、たくさん使われている語が配布文書の情報として重要なものと考えて良いのかは疑問が残る。たとえば、表 3 の「御協力」と「サラダ油」はどちらも多用され上位にランク付けされている語だが、これらは同等に読むことを求められる語なのだろうか。仮に前者が全ての保護者に何らかの行動を求める文面で使われ、後者が給食の献立成分表に記されているものだとした場合[iii]、園児に食物アレルギーがない限り、読めないことで支障が出てくる可能性が高いのは前者の方だろう。同じ頻出語でありながら、その読むべき優先順位にはずいぶん違いがあるのではないだろうか。野田（2014）の指摘するように言語面を書き換えるだけでは十分ではなく、情報伝達の面を意識することが「やさしい配布文書」に必要なことであると思われる。しかし、上記の先行研究では配布される全ての文書を同じ様に読み解くことを前提としており、文書の内容や重要度等、情報面には触れられていない。

表 2　森（2016：185）「表 7　学校お便りコーパスの名詞（特徴度上位 20 語）」より上位 10 語

	見出し語	お便り	BCCWJ の LB_fixed	特徴度
1	日（ニチ）	3,643	2,912	11,235.94
2	月（ガツ）	4,010	6,364	8,867.63
3	会	2,830	2,496	8,389.34
4	学校	2,469	2,012	7,553.15
5	学年	932	80	4,524.00
6	人参	906	122	4,198.72
7	給食	820	44	4,121.13
8	牛乳	827	124	3,781.54
9	醤油	771	163	3,353.44
10	委員	1,072	836	3,332.79

表 3　森（2016：190）「表 10　学校お便りコーパスの複合名詞（粗頻度上位 52 語）」より上位 10 語

	見出し語	お便り	BCCWJ の LB_fixed
1	子供達	822	3517
2	保護者	499	350
3	御協力	430	207
4	皆様	384	620
5	サラダ油	362	18
6	六年生	230	1
7	薄口醤油	211	22
8	御理解	205	16
9	御知らせ	195	93
10	一年生	176	2

望月（2017）は、配布文書を総括したコーパスに関して疑問を持ち、幼稚園の配布文書の中にはすぐに読

[iii]森（2016：185）では、食べ物や料理に関する語が多いのは「「給食だより」の語が大きいことが影響している」と指摘している。

む必要のある緊急かつ重要な情報とそうでないものとが混在していること、円滑に情報収集するためにはそれらを「情報のトリアージ」という考え方によって情報内容を分別する必要があることを指摘した。また、分別した文書に使われている文法項目と語彙（名詞・形容詞・動詞）を分析した結果、情報内容ごとに異なる特徴が見られたとしている。但し、具体的にどのような語が多用されているかについては触れていない。

外国人保護者が求めていることは、配布文書全てを一度に読み解くことではなく、支障なく園生活を送るために必要な最低限の情報を期限内に得ることではないだろうか。そう考えた場合、一番大切な語は単に一番多く使われている語ではなく、緊急かつ重要な情報に使われている語だと考えられる。そして、そこに頻出する語を知ることが本当の意味でのニーズ別語彙シラバスに繋がっていくのではないだろうか。

では、実際情報の重要度別に見た場合、頻出語にはどのような違いがあるのだろうか。

本稿では、文書全体に使われている語彙と、「情報のトリアージ」によって重要度別に分けた文書に使われている語彙をそれぞれ頻出順に分析し、そこにどんな違いがあるのかを検証する。

3. 「情報のトリアージ」とその分類方法

情報の重要度という観点から調査するに当たり、望月（2017）で提案している「情報のトリアージ」という考え方を用いることとする。

3-1 「情報のトリアージ」とは

トリアージ（仏 triage）とは「選別」を意味し、もともと災害時等に多数の負傷者をその重症度によって選別し、優先順位をつけることを表した言葉である。短時間の処置でも救命できる可能性の高い重度の傷病者、急いで処置する必要のない軽度の傷病者等をトリアージタッグと呼ばれる札で色分けし、診療を受ける順序を決定することで救命率を高める狙いがある。

情報も同様であり、あふれるたくさんの情報から緊急かつ重要な情報を優先的に得られれば、知らなかったことに起因する失敗を軽減できると考えられる。望月（2017）では、読み手にとって緊急かつ重要な情報かどうかという視点から、情報に優先順位をつけて選別する「情報のトリアージ」という考え方を提案している。

これまで、非母語話者にとってわかりやすい情報伝達のためには、情報の与え手が必要な情報を取捨選択することが一様に求められてきた（野田 2014、豊橋市 2015）。その場合、必要な情報かどうかは与え手の判断に委ねられ、読み手が情報を取捨選択することはできない。与え手による取捨選択のしかたによっては、母語話者と非母語話者の情報格差を広げてしまう懸念もある。しかし「情報のトリアージ」を考えて情報提供を行えば、自力ですぐに読むか、必要に応じて知り合いに翻訳を依頼したり日本語教室で尋ねたりするなどして後日ゆっくり読むか、読み手は「読みかた」を選択し、全ての情報から自ら取捨選択することができる。情報を削って与えるのではなく、「情報のトリアージ」を行って優先順を示して情報を提供することは、非母語話者に限らずすべての読み手にとって有益と考えられる。

3-2 「情報のトリアージ」を行った分類

望月（2017）では、ある幼稚園の１年間の配布文書を「情報のトリアージ」という観点から分類し、分類ごとに文法面・語彙面の難易度分析を行っている。それによると、配布文書内の情報は、「保護者の注意を要するもの（以下、[注]）」「保護者に家での生活を助言・提案するもの（以下、[助]）」「園側の報告（以下、[報]）」の３つに大別される（表 4）。

表 4　望月（2017：404）「表 1　情報のトリアージを考えた配布文書の分類」

高 ↑	保護者の注意を要するもの（注）	子どもが関わる行事の連絡 （保護者の注意を要するもの）	行事の説明（行事内容・日時・場所） 持ち物について（注意点・期限・用途） 服装について（着用するもの、着用する際のルール） 保育時間について（バスの時間・延長保育時間の変更） 行事の際に気をつけてほしい、して（しないで）ほしいこと、出欠席の確認等
		親が参加する行事	同上
重要 ・ 緊急	保護者に家での生活を助言、提案するもの（助）	提案	持ち物への提案 家庭での過ごし方への提案等
		助言	子どもへの声掛け等の子育てアドバイス 季節ごとの服装へのアドバイス等
	園側の報告（報）	あいさつ	時候のあいさつ・教師紹介・転園転入児紹介・締めのことば等
		報告	園からの報告・日々の園児の様子や終わった行事の様子、感想等
↓ 低		お知らせ	これから行われる行事の説明（園内の行事で保護者が特に関わらないもの）

[注]と[助]は保護者に働きかける内容であるのに対し、[報]は園生活を叙述する内容である。[注]は期限が設けられている情報もあり、読み手にとって最も緊急かつ重要な要素がある。一方、緊急性もなく必須情報ではないが知っていると便利な[助]、同じく緊急性はなく保護者の関わりを求めていない情報の[報]が続く。望月（2017）は、分類ごとに使われている語の種類や文法に異なる特徴があったことを指摘している。

4.　調査の概要

配布文書を「情報のトリアージ」によって分類した場合、そこに使われている頻出語にはどのような違いがあるのだろうか。ある幼稚園で 1 年間に配られた「学年だより」を調査対象とし、頻出語の集計を行った。

4-1　調査対象

調査には埼玉県 F 市の私立 M 幼稚園で年中児（4 歳児）に毎月配られた学年だより「年中だより」を使用した。「年中だより」は平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月までの 8 月を除く 11 か月間に発行された B4 版全 11 枚で、4 名の幼稚園教諭が毎月交替で執筆したものである。毎月定期的に配られ、配布文書の中でも最も多くの情報がもたらされるものであるため、この「年中だより」を調査対象とした。

F 市は日本人の人口約 10 万人に対して約 1600 人の外国人が居住する地域である[iv]。国別では数十人単位に分けられ、大きな外国人コミュニティがあるわけではない。M 幼稚園には各学年 75～100 名の園児が在籍するが、外国人保護者の家庭は各学年に 0 人～1 人程度で、国籍も限定されていない。市内でも園内でも日本語非母語話者はごく少数派として存在する地域である。つまり、同じ母語を持つ保護者仲間が近くにいるわけではないため外国人保護者同士で助け合うことは難しく、翻訳するにも国籍がさまざまなため、少数ながらも幼稚園側はその都度異なる対応を求められることになる地域と言える。

[iv] F 市住民基本台帳 2014 年 10 月 1 日調べ

4-2　調査方法

BCCWJ との比較調査を行った先行研究である長谷川・西尾（2016）、森（2016）では、配布文書の中で特に名詞に特徴が見られたことがわかっている。そこで、本論では調査対象から名詞を抽出し、総名詞数を集計した後、表 4 を参考に「情報のトリアージ」を行い、情報を[注][助][報]の 3 つに分類し、そこに使われている名詞の特徴を分析する。

長谷川・西尾（2016）、森（2016）はともに BCCWJ と比較するために形態素解析を行っており、そのため語が「細かすぎる」（長谷川・西尾 2016：249）、「見えなくなる語がある」（森 2016：188）と指摘している。たとえば、森（2016）は「見えなくなる語」の典型として「幼稚園」という語を挙げている。形態素解析によると、「幼稚園」は「幼稚」という形状詞（いわゆる形容動詞の語幹）と「園」という接尾辞にわけてカウントされる。このため、「幼稚園」という複合語のかたちで頻出していながらその語は見えなくなり、代わりに形状詞のかたちで使われていないにも関わらず「幼稚」という語が頻出語の上位に挙がってしまうのである[v]。長谷川・西尾（2016）においても同じ理由で「幼稚」という語が形容詞・形状詞の頻出語として上位に挙げられている。

本稿では同一文書内の比較であること、幼稚園の専門用語などは形態素解析で「見えなくなる語」になると懸念されることから、合成語は手作業によってそのまま抽出することとする。

5.　調査結果

文書内の名詞を集計した結果、総名詞数 1459 語（異なり語数 705 語）が抽出された。これを情報の重要度別に分類すると、［注］736 語（異なり語数 390 語）、［助］104 語（異なり語数 85 語）、［報］619 語（異なり語数 337 語）となる。5-1 では文書内の全ての名詞を集計した場合と、重要度別に分類して集計した場合との頻出語を比較する。5-2 では分類ごとに異なる名詞の特徴を『日本語能力試験出題基準改訂版』[vi]との対照により分析する。

5-1　頻出語調査

文書全体で最も多用されていたのは「子ども達（41 回）」で、「～月（27 回）[vii]」「お友達（20 回）」と続く（表 6）。「子ども達」が多用される傾向は森（2016）や長谷川・西尾（2016）と共通する結果である[viii]。

しかし、重要度別の集計を見ると、これらの語が文書全体で多用されているわけではないことがわかる。「子ども達（41 回中 36 回）」や「お友達（20 回中 19 回）」が多用されているのは、緊急性の低い[報]の情報内である（表 9）。[報]は学期の総括や子どもたちの行事での様子が書かれているため、これらの語が繰り返し使われていると考えられる。「〇〇ちゃん」「〇〇君（くん）」「～月生まれ」は総計（表 6）でも[報]のみの集計（表 9）でも上位だが、これは毎月の配布文書に誕生月の園児の名前が掲載されるためである。保護者がすぐに読む必要のない[報]の情報の典型的な例と言えるだろう。

---

[v]森（2016）ではこの「見えなくなる語」を拾い上げるために、名詞に接頭辞や接尾辞を加えたものに関しては【複合名詞判定】のルールを設け、表 3 の結果を得ている。

[vi]『日本語能力試験出題基準改訂版』2002.2　国際交流基金
2010 年新試験開始以降日本語能力試験の出題基準は公表されていないため、上記の旧試験の出題基準を使用することとする。

[vii]語中の「～」には数字が、「〇〇」には固有名詞（園児の名前）が入る。

[viii]表記は配布文書の通り。尚、同じ語で表記の異なるものはカタカナ表記よりひらがな表記、ひらがな表記より漢字表記を優先し、漢字は文書に使われた漢字を使用した。

一方、総計で上位に挙がっていた「名前」「体操着」「〆切[ix]」「体操教室」などはほぼ[注]の情報内だけに使われている（表 7）。[注]で突出しているのは日用品や行事の語彙である。「〆切」が上位なのも、提出物などの期限が書かれているからで、これは緊急かつ重要な[注]情報だからこそ現れる語だと考えられる。[助]は一般的に見られる語彙が上位に挙がっている（表 8）。家庭内における生活面の助言なので、幼稚園ならではの語彙が少ないのは必然ともとれる。

このように、名詞の種類には 3 分類で偏りが見られ、使用語彙が内容別に異なっている。上位 20 位 27 語の中で 3 分類すべてに使われているのは「～月 」（[注]9 回、[助]1 回、[報]17 回）と「お家」（[注]5 回、[助]2 回、[報]1 回）だけだった。

表 6　名詞総集計

順位	名詞	（回）
1	子ども達	41
2	～月	27
3	お友達	20
4	名前	18
5	姿	16
6	体操着	14
7	年中だより	13
8	～月生まれ	12
	〆切	
	○○ちゃん	
	○○君（くん）	
12	体操教室	11
	友達	
14	お弁当	10
	写真	
	場合	
	中（なか）	

表 7　重要度別集計

[注]の情報内の名詞上位 16 語

順位	注語彙	回数
1	名前	17
2	体操着	14
3	〆切	12
4	体操教室	11
5	写真	10
	場合	
7	～月	9
8	ゴム	8
	雨天	
	写真販売	
11	お弁当	7
	縄跳び	
	服装	
14	ご協力	6
	具（ぐ）	
	登園	

表 8　重要度別集計

[助] の情報内の名詞上位 16 語

順位	助語彙	回数
1	習慣	3
	給食	
	歯みがき	
	お弁当	
5	毎日	2
	冬休み	
	生活	
	手洗い	
	形	
	気温	
	夏休み	
	ご家庭	
	お箸	
	お家	
	うがい	
	量	

表 9　重要度別集計

[報]の情報内の名詞上位 13 語

順位	報語彙	回数
1	子ども達	36
2	お友達	18
3	～月	17
4	姿	14
5	～月生まれ	12
	○○ちゃん	
	○○君（くん）	
	年中だより	
9	友達	11
10	中（なか）	8
11	～学期	7
	練習	
13	クラス	6

[ix]「締切」は 2 級語彙だが、文書内は「〆切」という常用漢字ではない漢字を使用していたため、級外として扱った。

5-2　頻出する「一般化できない語」—日本語能力試験旧出題基準との対照

それぞれの分類ごとに頻出する語には、どのような特徴があるのだろうか。指針として『日本語能力試験出題基準改訂版』（以下、旧出題基準）を用いてさらに検証する。

旧出題基準の「語彙」の基準は、3、4 級は「日本語教科書から普遍的な共通の文字・語彙を選定」し、1、2 級は「一般社会、日本語教育、学校教育（中学・高校）における語彙の使用を調査」した資料を基に作成されている[x]。配布文書の語が旧出題基準にどのぐらい含まれているのか調べることで、一般的に学習されている語との違いがわかるのではないか。出版年や選定の基準から旧出題基準の語彙が一般的だと言い切れないという指摘も想定されるが、ひとつの一般的・普遍的な語彙の指針としてここで扱うこととする。

望月（2017）は、配布文書に使われている語を旧出題基準と照らし合わせ、級別の比率[xi]を出している。その結果、[報]と[注]にはどちらも多種類の級外語が使われているが、[注]が特にその傾向が強く級外語が約 4 割を占めることを指摘している。しかし、異なり語数を見てみると[注]の級外語は半減するのがわかる。つまり、[注]には同じ級外語が繰り返し使われていることになる。具体的に見ると、表 9 に挙げられた[報]の頻出語の中で、級外語は「年中だより」のみであるのに対し、[注]の表 7 には級外語が 6 語もある。

改めて級外語を抜き出してみると、やはり[注]は園での行事名やそこで使う持ち物の名前が多い（表 10）。しかし、そもそもそのような活動を行っていない幼稚園もあれば、行っていても異なる名称を用いる幼稚園もある。たとえば、調査対象の M 幼稚園には年に複数回「おみそ汁会」という行事があり、決められた日にみそ汁の「具」を家庭から持ち寄ることが求められている。期限内に持参することが求められる持ち物の情報なので、保護者の注意を要する[注]の情報に「具」「おみそ汁会」の 2 語が頻出している。しかし、このような行事がない幼稚園の文書にはこれらの語はまず現れない。他にも、この幼稚園では外遊びの際に「カラー帽子」をかぶることが求められているため、この語が表 10 に登場しているが、幼稚園によって「色帽子」「紅白帽」「赤白帽子」など別の呼び方や種類の異なる帽子が使われている場合もあれば、そもそも指定の帽子自体が存在しない幼稚園もある。どんな行事があるか、どんな持ち物が必要か、そしてそれらにどんな名称が使われているのかは幼稚園ごとに異なる。つまり、1 つの幼稚園で頻繁に使われても、それが全ての幼稚園に共通する頻出語とは限らないのである。

表 10　級別名詞数と級外の頻出語

	4 級（語）	3 級（語）	2 級（語）	1 級（語）	級外（語）	級外の頻出語　(回)
注	173	61	194	44	264	体操着（14）、〆切（12）、体操教室（11）、縄跳び（7）、具（ぐ）・登園（6）、おみそ汁会・持ち物(5)、おもちつき・カラー帽子・運動会・牛乳パック・年中全クラス（4）
注異なり	79	35	103	30	143	
助	30	20	28	6	20	歯みがき（2）
助異なり	24	15	25	4	17	
報	214	82	149	21	152	年中だより（12）、進級・年長さん（5）
報異なり	81	38	87	20	111	

[x]注 vi ： p.39　Ⅰ.総説 1.基本的方針参照。

[xi]『日本語能力試験出題基準改訂版』に載っていない合成語に関しては、「日本語読解学習支援システムリーディングチュウ太 http://language.tiu.ac.jp/」で検索し，次のように級分けを行っている。
4 級語+4 級語の合成語→4 級へ　　3 級語+3 級以下の語→3 級へ
2 級語+2 級以下の語→2 級へ　　1 級語+1 級以下の語→1 級へ　　級外の語を含む→級外へ
本来の意味と明らかに違う使われ方に関しては対象級が掲載されていても級外としたほか、形容詞からなる派生語（例「大きさ」「少なめ」など）は形容詞としてカウントし、ここからは除外している。

このような幼稚園ごとに異なる「一般化できない語」が、3 つの分類の中で保護者がまず読むべき[注]の情報内に特に多く含まれ、繰り返し使われている。一方、[助]には級外語や旧出題基準にない合成語が少なく、表 8 内の級外語は「歯みがき」のみだった。表外でも[助]の級外語は「乗り降り」「早寝早起き」と言った基本的な動詞を使った連用形名詞[xii]などであり、級外語とは言え[助]には特定の幼稚園でしか使われないような「一般化できない語」はほとんど見られず、[助]の一般的な語の多さを裏付ける結果となった。

6. 先行研究との比較

ここで先に挙げた森（2016）、長谷川・西尾（2016）という 2 つのコーパス研究と本稿の調査結果を比較してみたい。

6-1 一括集計で見えなくなる語

森（2016）は 4 つの自治体から収集した 810 のプリントを「総合」「食育」「保健」「安全」の 4 領域に分類し、延べ 47 万語を超える語を抽出して分析している。長谷川・西尾（2016）では『幼稚園の配布文書コーパス』の一部のみを分析対象としていたが、『幼稚園の配布文書コーパス』全体はA4 用紙相当で 228 枚の 93 種類の文書で構成されるという（長谷川・西尾 2017）。どちらも多種類の文書を便宜上は内容別・文書の書き手別に分類しているが、データ集計では全ての文書を一括して行っている。それによって埋もれてしまう重要な語はないだろうか。

本稿は 1 つの幼稚園で配られた1種類の文書中のデータに過ぎないが、それは特定の保護者が1年間の幼稚園生活を送る上で手に取った情報の、必要最低限のデータであるとも言える。そのデータを「情報のトリアージ」という考え方を用いて語の分類を行った結果、一括集計で上位 1 ～3位までの語は緊急性の低い[報]の情報内の頻出語であることがわかった。保護者にまず読み解いてほしい[注]の情報と、緊急性の低い[報]や[助]の情報とでは、頻出語の特徴は異なる。語の特徴が異なる他の情報と混在した場合、本当に重要な語が頻出語として上位に来ないことが考えられる。

また、文書内には「一般化できない語」が頻出している。幼稚園で使われていることばにはバリエーションが多く存在し園による差が大きいことについては、既に他研究においても指摘されている（樋口2014、富谷他2012）。これらの語は園に携わる当事者でないとたとえ日本語母語話者でも理解ができないものもあり、部外者が他言語に翻訳したりやさしい日本語に言い換えたりしても情報が伝わらない可能性がある。そのような「一般化できない語」は重要な［注］の情報に多く含まれており、看過できない。しかし、異なる複数の幼稚園のデータを一括集計してしまったらどうだろう。「一般化できない語」は、幼稚園によって使われる語が異なるため、どの幼稚園でも使われる「一般化できる語」に押され、たとえそれが重要だとしても頻出語の上位に挙がってこないという問題が考えられる。

一括集計では本当に読み手が読みとるべき語が見えなくなる可能性があること、そうならないためにも「情報のトリアージ」を用いて情報を分類し、緊急かつ重要な［注］の情報に使われる語の特徴を汲みとる必要性があることが示唆される結果となった。

[xii] 文書の中には「関わり」「訪れ」のような動詞の連用形名詞が多く使われており（総語数 107 語、異なり語数 53 語）、旧出題基準に載っていない限りすべて級外として扱った。この特徴については別稿で論じたい。

6-2　新たに見えてきた課題

他にも、先行研究との比較によって新たに見えてきた課題がある。形態素解析によって「見えなくなる」合成語の問題については先に挙げた通りだが、もう一つ考えられるのが表記の問題である。

たとえば、長谷川・西尾（2016：247）は、BCCWJ に対して配布文書の接頭辞「御」の多さを指摘し、「文の丁寧さという特徴が見てとれる」としている。森（2016：191）でも「御の多用」を指摘し、「子どもを持つ外国人のため」に初級の教科書の早い段階で「お／ご」を取り上げる必要性があると指摘している。どちらの研究でも形態素解析には解析エンジン MeCab と解析辞書 UniDic を使用しており、その仕様上、語彙素は漢字で表記している。このため、実際の書字形は「ご」または「お」で、「ご家庭」「お家」（長谷川・西尾 2016）、「ご協力」「ご理解」「お知らせ」「お子様」（森 2016）と「ご」も「お」も使われているのだが、データ上は全て「御」で集計されている。

本稿のデータによると、接頭辞「ご」のついたものは延べ語数で 13 語、異なり語数では 4 語に絞られ、どれも保護者への敬意を表すかたちで使われている。分類別では[注]で最も多く 7 回使われているが、これはすべて「協力」という語の接頭辞として、つまり「ご協力」というかたちでしか使われていない。

例 1　役員さんのご協力を頂き子ども達だけで行います。（年中だより 9 月号）
例 2　具のご協力をお願い致します。（同 1 月号）

一方、接頭辞「お」のついたもの[xiii]（例「お友だち」「お顔」など）は 136 語あり、どの分類の中にも万遍なく使われているが、その意味は一様ではない。接頭辞「お」のつく言葉について、井上（2012：37）は美化語「お」の中には幼児の参加する場面で良く使われる「幼児語」としての用法があり、「保育関係者が「お」を多用して、主婦と相互作用をする」ことで広がった幼児語的用法があることを指摘している。配布文書の「お」のつく言葉には、この幼児語的用法と考えられるものが多く存在する。この幼児語的用法の中には「お絵かき（絵を描くこと）」「お遊戯（集団で踊ること）」など、「お」をとると意味が異なってしまうものも含まれている。詳細は別稿に譲るが、このように「ご」と「お」の使い方には大きな違いがあり、「御の多用」と一括りにして日本語学習に繋げることには懸念が残る。

現在は電子データにして整理することで、目的に合わせた独自のコーパスを構築しリスト化することができる。ただ、データ処理の段階で正しく解析するためには語を整えなければならず、実際の文書通りの語を調査することができない。加工修正したコーパスでは、語や文型の傾向をつかむことはできるが、合成語の問題や表記「お／ご」の問題のように、本当に必要な語が見えなくなってしまう可能性がある。コーパスをもとにシラバスを作る場合、形態素を基準とした頻度集計の弱点を理解した上で活用すべきだろう。

7.　まとめと考察

前章までの結果をもとに、本章ではニーズ別語彙シラバスに向けた提言をまとめていきたい。

配布文書によって園が伝えてくる情報の中には、喫緊に伝えたい情報ばかりではなく、すぐに読む必要のない情報も含まれている。「情報のトリアージ」によって文書を［注］［助］［報］の３つに分類して頻出語の

[xiii]語源的に接頭辞「お」がついているとされる語でも、現代語として「お」をとると意味がとれなくなる語は除く。たとえば、「おかず」の語源は「御数」、「おもちゃ」は「持ち遊び」が訛って省略された「もちゃ」に「お」がついたものが語源とされるが、「お」をとり「かず」「もちゃ」となると意味がとれなくなる。したがって「おかず」「おもちゃ」はここに含めない。

調査を行ったところ、一括集計した場合と異なる結果が見えた。幼稚園に子どもを通わせる外国人保護者がすぐに知っておきたい［注］の情報内の語が、全ての情報の中で頻出しているわけではない。そのため、一括集計では重要な語が埋もれてしまっている可能性がある。また、幼稚園ごとに名称が異なる「一般化できない語」のように大量のデータの中で見えなくなっている重要語もある。語彙シラバスを作成する際にはこれらを意識して作成する必要があるだろう。

ニーズ別語彙シラバス作成に向けての課題はもう１つ考えられる。それはニーズの捉え方である。先に述べた通り、子どもを幼稚園に通わせている外国人保護者の中には、幼稚園の配布文書が読めない、読めるようになりたいというニーズがある。この「読めるようになりたい」というニーズはあくまで表層的なもので、その深層には「（配布文書から情報を得ることで）幼稚園生活を円滑に過ごしたい」というニーズがある。前者は言語上のニーズ、後者は言語の壁によってかなえられていない行動上のニーズとも捉えられる。言語上のニーズのみを見れば、その学習目標は全ての配布文書を一様に読むこととなり、全ての文書で使用頻度の高いものからシラバスを作っていくことになる。しかし深層の行動上のニーズを考えれば、「一様に」読み解くことがゴールではなくなる。然るべきタイミングで然るべき行動を起こせるようになるためには、「情報のトリアージ」によって重要度という視点から必要な語を選定してシラバスを作ることが求められるはずである。外国人保護者が本当に求めていることは後者なのではないだろうか。読むという行為の先に学習者は何を求めているのか。言語上のニーズの深層まで把握することで、シラバスの内容も変わってくると考えられる。

8. 今後の課題

今回の調査によって、ニーズ別語彙シラバス作成において、情報の重要度という視点を持つ必要性が見えた。重要なものから優先的に学習していくことで、重要な情報から優先的に自分の手で獲得することができるようになる。この視点を持つことは、同時に配布文書の書きかたにも示唆を与えている。配布文書の情報を分類して提供することは、外国人向けに全ての文書を再作成するよりも幼稚園側の負担は少なくなる。それだけでなく、外国人保護者に限らず情報を受け取る全ての保護者にとって有益と考えられる。今後はさらに円滑な情報提供の方法、および外国人保護者のニーズを満たす語彙シラバス作成を目指し、さまざまな配布文書からもたらされる情報を重要度という観点から見直し、表４の分類の整合性などを考えていく必要がある。

また「一般化できない語」への対応など、語彙シラバス作成にあたってはそれぞれの幼稚園との連携が必須であり、日本語教育関係者だけで完結できない問題がある。しかし、だからと言って普遍的なシラバス作成が不可能というわけではない。使われている名詞は異なっているが、持ち物や行事など上位概念は一致している。必要な語彙を並べて「必要な単語帳」を示すのではなく、必要なトピックの優先順序を示し、「必要な単語帳の作り方」を提示することはできるのではないだろうか。整理のしかたを提示することは保護者のサポートだけでなく、幼稚園関係者への言語的サポートにも繋がっていくと思われる。さらに日本語教育の面からひと言加えるとすれば、「一般化できない語」は幼稚園生活を送る上では必須でも卒園後はまず使わない語とも考えられる。シラバスに組み込む際には、これらの語が期間限定の使用語彙であることを念頭に置いておく必要があるだろう。

幼稚園、外国人保護者、そして日本語教育関係者がどのような連携をすれば外国人保護者に情報が行き届くのか。外国人保護者だけでなく、幼稚園の負担も減らすために日本語教育側からできるサポートについても引き続き模索していきたい。

参考文献

1.井上史雄(2012)「美化語「お」の循環過程と幼児語の「お」」『明海大学外国語学部論集』第 24 号、35-51

2.内海由美子・澤恩嬉（2013）「外国人の母親に対する読み書き能力支援としてのエンパワーメント—幼稚園・保育園と連携した主体的子育てを目指して—」『日本語教育』第 155 号、51-65

3.佐藤千瀬・志村洋子（2004）「日本の幼稚園に子どもを通わせる留学生家族の抱える問題」『留学生教育』6 号、43-58

4.首藤敏元(2005)「国際交流地域の幼稚園・保育園における共生教育総合支援計画」『総合研究機構研究プロジェクト研究成果報告書』第 4 号　埼玉大学総合研究機構

5.富谷玲子・内海由美子・仁科浩美（2012）「子育て場面で外国人保護者が直面する書き言葉の課題—保育園・幼稚園児の保護者を対象とした調査から—」『神奈川大学言語研究』第 34 号、53-71

6.豊橋市（2015）『「やさしい日本語」を使ってみよう！』文化市民部多文化共生・国際課

7.西尾広美（2013）「幼稚園における「やさしい日本語」使用の必要性—教師と非母語話者の保護者のコミュニケーションの現状調査から—」『日本語研究』第 33 号、99-112 首都大学東京

8.西尾広美・塚原佑紀（2015）「幼稚園の配布文書に使われている文法項目の特徴—幼稚園における「やさしい日本語」のガイドラインの作成を目指して—」『日本語研究』第 35 号、85-98 首都大学東京

9.野田尚史（2014）「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へ—母語話者が日本語を使うときの問題として—」『日本語教育』第 158 号、4-18

10.長谷川守寿・西尾広美（2016）「『幼稚園の配布文書コーパス』の作成と試行調査」『言語処理学会 22 回年次大会発表論文集』、246-249

11.長谷川守寿・西尾広美（2017）「語彙・文型調査を目的とした『幼稚園の配布文書コーパス』の作成について—特定の目的コーパスの作成例として—」『人文学報』517-3 号、55-71 首都大学東京 人文科学研究科

12.樋口尊子（2014）「幼稚園で使用されることば—東大阪地域における外国人保護者への日本語支援のために—」『樟蔭国文学』第 51 号、47-63

13.望月雅美（2017）「配布文書における情報のトリアージの必要性—幼稚園配布文書の内容面調査から—」『言語をめぐるＸ章—言語を考える、言語を教える、言語で考える—』埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊２、401-413

14.森篤嗣（2016）「子どもを持つ外国人のための語彙シラバス」山内博之（監修）森篤嗣（編）『ニーズを踏まえた語彙シラバス』第 9 章、くろしお出版、179-195

謝辞

本稿は、2016 年度に埼玉大学大学院人文社会科学研究科に提出した修士論文『日本語を母語としない保護者に対する「やさしい配布文書」とは—情報のトリアージを考えた配布文書に関する一提案—』の一部に追加で調査を行い、加筆修正を行ったものです。論文執筆にあたりご指導下さった嶋津拓先生、川野靖子先生、査読にあたり貴重なご意見を下さった諸先生方、関わって下さった皆様に心より感謝申し上げます。